

佳作

『福祉』の答え

山形県立天童高等学校3年 中村 円香

2年生の秋、校外学習で初めて認知症の方に接した。その方は、何度も何度も私の名前を聞き、同じ話を繰り返し、しまいにはお風呂に入る際に暴れ出した。授業で「認知症」を学び、基本的なことを理解していたつもりだったが、目の前の「認知症」の方の姿をどうしても受け入れることができなかった。介護の難しさを目の当たりにした出来事だった。

なぜ「福祉」を学ぼうとしたのか、自分でも明確な理由はなかったと思う。しかし、2年生の最初の授業での「あなたにとって『福祉』とは？」との問いに、「高齢者、障害者に何かしてあげること」と答えると、先生は、「『福祉』とは、すべての人の幸せを考えること。福祉を通してみんなが幸せになること」と教えてくれた。なぜ、福祉を通してみんなが幸せになるのか、私にはうまく理解することができなかった。そもそも、この質問に明確な答えなどあるのだろうか。少なくとも当時の自分には答えることができなかった。

明確な答えが出せないまま、3年生の施設実習を迎えることとなった。この実習に向けて何度も実技を練習してきたとはいえ、初日はスムーズな食事介助や、利用者の方との親しい会話もできず、そわそわして終わろうとしていた時のことだ。ある利用者の方が突然、口に含んだお茶を吐き出し始めた瞬間、側にいた介護士の方がとっさに自分の手でその吐き出したお茶を受けとめようとした。何のためらいもなく、手を差し出したこと、そしてその後、何事もなかったかのように、利用者の方に体調を気遣う言葉をかけていたことにとっても驚いた。自分だったら、「うわっ、汚い！」と声を出していたかもしれない。また、自分の手を差し出すこともしなかっただろう。介護とは、相手の小さな変化を見逃さず、次に起こることを予測し、相手の気持ちになって対応することが大切なのだと実感した。

実習の最終日、担当の介護士の方が、こんなお話をしてくださった。「利用者に対し、何かをしたいというのは自己満足であって相手からすれば迷惑なことも多い。私たちの仕事は、利用者の方がどんなことを望んでいるのか、どんな気持ちでいるのかを理解して、そのお手伝いをさせていただくものだ」と。この言葉を聞いて、自分自身が間違った方向から「福祉」を見ていたことに気づかされた。「福祉」には、自分が何かしてあげることではなく、常に相手の気持ちになって考える「当事者意識」が必要なのだと改めて感じた。今までの自分は、「何もできない自分」のことばかりが気になっていた。こんな未熟な私を受け入れようとしてくれる利用者の方が目の前にいるのに、それを見ようとしなかったのだ。こんな自分では、相手の方を安心させてあげることがもちろん、幸せな気持ちになどすることはできない。相手の思いに寄り添い、小さな希望を大切に、その希望を実現するための自分なりの関わり方が大切なのだと今思う。相手の気持ちに自分の思いがぴったりと寄り添うことができるようになった時、「私も幸せ」になるのだということがようやく理解できたような気がする。

このような体験を通して、少しではあるが「福祉とは何か」という答えが見えてきたように思う。しかし、明確な答えはまだ出ていない。これは、私自身が「福祉」の一部しか見ていないからだと思う。私は将来、介護福祉士になりたいと考えている。以前は漠然としていたが、今は実習を通して出会った、たくさんの利用者の方々や、介護士の方々の姿から、はっきりと「介護福祉士」という目標が見えてきた。大学では、さらに自分の答えを探すために、様々な福祉の考え方、あり方、現状と課題を学び、自

分を必要としてくれる人々の支えになれるよう、人間的にも大きく成長していきたいと思う。

「あなたにとって『福祉』とは？」この答えがいつか必ず出せるように、これからも探し続けたい。